

宿場町の過去と未来をつむぐ「ホタルの明かりが迎える町」

福島県桑折町・桑折駅前団地



福島県桑折町。県庁所在地の福島市の北に位置するこのまちは、江戸時代は奥州街道と羽州街道との追分に位置する宿場町だった。旅人たちはこの地をターニングポイントとして、東北を北上する人と日本海側を目指す人に分かれていった。まさにここは「人の行き交うまち」だった。

2015年4月24日と25日。桑折駅前広がるまち並みの下で新しく完成した災害公営住宅の内覧会が行なわれた。敷地1・4ヘクタール。47戸の木造住宅はすべて2階建ての3LDK。駅近の一等地に新しいまちが生まれるその瞬間を、入居予定の家族達が眩しそうな表情で見て回った。3・11からの災害によって被災し、この場所に隣接する仮設住宅で生活してきた人たちだ。

76歳の原田郁夫さんは、奥さんと入居予定。仮設住宅から、この災害公営住宅ができあがっていく様子を毎日楽しみに見ていた。「これまでの仮設住宅は狭かったけど、今度は3LDKですからね。これからは子供が孫を連れてやってきても、寝袋ではなく布団で寝

かせてあげられる。本当に助かります」

74歳の佐藤昇さんも夫婦で入居。震災前に住んでいたのは、古い藁葺の家だった。

「仮設住宅と違い一戸建てだし、お隣とは離れているのでゆとりがある。しかもここはまちの一等地ですから。こんな環境が良いところに住めるなんて、最高ですよ」
入居者の中には桑折で被災した人のほかに、同じ福島県の浪江町出身者が多くを占めている。3・11から始まった苦難で生まれ育った家に住めなくなった人たちが、いまこの場所で新たなつながりを築きつつある。高橋宣博・桑折町長が話す。

「仮設住宅では、桑折町の町民と浪江の皆さんが、紙芝居などの文化活動やボランティアを共にして交流を深めていただいた。周辺の地域住民との触れ合いもありました。もし仮設住宅がまち外れにあったら、このような活発な触れ合いはなかったかもしれません」
仮設住宅から生まれた新たなコミュニティの温かさを、内覧会を訪れた親子3世代、9人で2棟

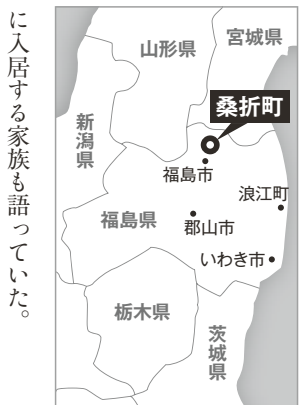
うに設計。空間に変化と広がりを持たせた。
「この災害公営住宅の設計には3つの軸を設定しています。ひとつは桑折らしい景観をつなぐ軸。旧街道の街並のイメージを継承した和のデザインです。2つ目は人をつなぐ軸。新たな交流の場となる集会所や、子供たちの遊び場となるコミュニティスペースです。そして3つ目は未来をつなぐ軸。将来へ向かってこの場所が桑折の中心となるように、メインストリートは6・5メートルの広さを持たせ、さらなる整備に向けた足がかりとしているのです」(佐藤)

次の世代を見据えた新しいまち作りが、いままろろうとしている。

本心の復興へ

桑折町地域整備課の課長補佐兼都市整備係長の鈴木清志さんは、UR都市機構と共にこのプロジェクトを進めてきた。

「URさんは見事に周囲のまち並みと調和した公営住宅作りを叶えてくれました。現場に何度も足を運んで最後まで調整してくれました。プロジェクトを最初から最



に入居する家族も語っていた。「ご近所は親切で顔馴染みの方も多くいるし、駅の近くで銀行もお店も近くて便利。開放的で、トイレとお風呂に窓があるのもいいですね」と、祖父母世代が話せば、小学生の孫世代と入居する夫婦は、「子供が喜んですぐにも入りたいって言っています。歩道も広いし、公園が家の後ろにありますから」と言う。桑折町の明日を築くこの住宅は、どのようなコンセプトで作られたのだろうか。

将来を見据えた3つの軸

桑折町の災害公営住宅の土地にもともとあった蚕糸工場は時代の変遷とともに役割を終えた。高橋町長が住民のために下した決断は、大型商業施設ではなく、新しい住宅地をこの地に作り出すことだった。その決定をしたわずか半年後までトータルでコーディネートしていただいた。さらに感謝しているのは、桑折のまちづくりという観点から地元の建設業者を中心に施工してくれたことです」(鈴木係長)

高橋町長は、桑折のまちの新しいスタートについてこう話す。

「3・11からの復興に向けた歩みをしつかり踏み出す環境がようやくできました。この場所に落ち着く人も、自宅を再建してやがて移っていく人もいます。この災害公営住宅が自分たちの道を歩んでいく充電期間でもいい。これからは、いよいよ待ちに待った本当の心の復興です」

桑折町の初夏の風物詩は、産け沢川の夜を彩るホタルの光だ。そして桑折町災害公営住宅には、そのホタルを思わせるようなホッとするデザインの照明があしらわれている。公営住宅の入居は6月1日から。「お帰りなさい」と

族がそこにある。



桑折町の災害公営住宅は一等地にあるお洒落な一戸建て

年後に、3・11という大災害がこのまちを襲う。高橋町長は振り返る。「福島県内でもいち早く、2011年の5月の連休明けには仮設住宅の入居にこぎつけ、桑折町民だけではなく浪江の方々も受け入れました。しかし、建物の基礎組みもされておらず丸太杭の上に設置されていて、徐々に劣化していく仮設住宅は恒久的な住まいではない。皆さんの住環境のために別の場所に災害公営住宅を作ること、必然的な決断でした」

高橋町長が災害公営住宅を築き上げるパートナーに選んだのは、UR都市機構だった。今回その中心メンバーとなったのが、宮城・